
「自殺代行株式会社」

nylon300

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「自殺代行株式会社」

【Nコード】

N8043G

【作者名】

nylon300

【あらすじ】

リストラされたサラリーマンと、謎の男を巡る自殺模様。

おれの名前は木村智史、二十八歳のサラリーマンだ。いや、サラリーマンだった。

三ヶ月前にリストラされたのだ。きっかけは些細なもので、元々仲の悪かった上司と口論になり、部署でも仲間はずれにされた。そこに百年に一度の金融危機、待っていましたと言わんばかりに肩を叩かれ、追い出されてしまった。

もともと三流大学を卒業し、やりたいこともなく入った会社だったから、そんなに未練はない。しかし、二十八歳にもなって手に職もなく、この不況を生きるのは少々しんどい。

もちろん、リストラされた直後は転職先を探して手当たり次第に走り回ったりもしたが、どこも相手になどしてくれない。そのままズルズルと日雇い派遣に身を投じる日々になってしまった。

ろくに貯金もしていなかったので、そろそろ電気代も払えなくなってきたしまった。

どうしたものだろうか？

そんなのもう決まっているだろ？

せつせと自殺の準備だ。

深夜二時、自宅マンションのベランダから飛び降りようと、さつきから努力はしているのだが、なかなか決心がつかない。

「どこまでいっても中途半端なやつだな僕おれ・・・」

思えば子供の頃から、何かに打ち込んだことなんてなかった。

死ぬと決めたのにそれすら実行できないなんて、もう笑うしかない。

「タバコでも吸って、一服したらもう一回いくか」

腰を揚げたその時だ、
「ピンポン」

玄関のチャイムが鳴った。

「誰だ？こんな時間に？」

深夜二時に訪ねてくるような友人をおれは知らない。

そもそも、ろくに友人と呼べるような存在さえいるかどうか怪しいものだ。

冷えきつたりリビングを通り、恐る恐る玄関に近づき窓から覗いてみる。

しんと静まり返った廊下には青白い電灯が光っているだけで誰もいなかった。

しかしチャイムは鳴り続けている。

「こんな時間にいたずらか」

ため息を吐きつつ玄関を開け、しかたなくインターホンを調べる。どこにも異常はなく、いたずらされた形跡もない。

気がつけばチャイムの音も消えていた。

「ついに頭おかしくなったのかおれは」

ふたたびため息を吐き、玄関の扉を閉めた。

「ん？」

見慣れない皮靴がある。

「おいおい今度は何だよ？」

静かに、だが素早くリビングに急ぐ。

リビングのオレンジ色の明かりに照らされ、目の前に表れたのは黒いスーツに身を包んだ背の高い男だった。

「あんた誰だ？」

黒いスーツの男はこちらに気づき、くるっと振り返ると言った。

「すいません、私こういうものです。」

そう言つて男は名詞を突き出した。

その時の私の顔はとても笑えるものだっただろう。なんせ泥棒だと思つた男が、いきなり礼儀正しく名詞を出してきたのだから。頭の中は大洪水、氾濫寸前だ。

混乱したまま、私は素直に名詞を受け取ってしまった。

名詞にはこう書かれていた、

「自殺代行株式会社 営業・草野 学」

一瞬目を疑ったが、そこには確かに自殺の二文字があった。

この男は一体何者だ、頭は混乱していたが私は平静を装いつつ男に尋ねた。

「こんな夜中に人の家に勝手に上がりこんで、何か用ですか」

精一杯にらみつけて放った言葉のつもりだったが、男は鼻で笑ってかえした。

「あなた、自殺しようとされていましたでしょ？ですからこうしてこちらにお邪魔申し上げたのです。私の仕事は自殺代行。あなたの自殺の代行をして差し上げます。」

この男はなに訳の分からないことを言っているんだ。自殺代行？そんな仕事があるのか？

オレの頭は混乱するばかりだった。しかしなぜこの男はおれが自殺しようとしていたことを知っているんだ。超能力者？いや、そんな人間いるはずがない。

男は私のことなど気にも留めずテーブルの上に書類を並べ始めた。

「簡単に説明申し上げます。自殺代行、1回3万円です。」

「やりますか？ やりませんか？」

「何勝手なこと言ってるんですか、人の部屋に勝手に上がり込んでおいて、いきなり自殺を手伝うだなんて。帰ってください。」

「そう、固いことをおっしゃらないで下さい。あなたが自殺したいと思われたから、こうして私がそれを代行して差し上げようということです。実際あなたはまだ自殺できずに生きておられる。私に殺されたほうが楽に死ぬると思いますか？」

男の話にも一理ある。

私は自殺が出来なかった。自殺がしたいのになかなか出来ないというのは結構辛いものだ。ならば、この男にやってもらったほうがいいのではないだろうか？

こんな男の話に納得してしまうなんて、ついに頭がいかれてしまっ

た証拠だ。

「わかった、その話のつてやるよ。」

「ありがとうございます。ではさっそく」

男は書類の中からパンフレットを取り出した。

「どのような死に方をご希望されますか？」

私はパンフレットを覗き込み、一通り目を通した。

「首吊り」これは後始末が大変らしいし、排泄物垂れ流しの姿など誰にも見られたくない。

「飛び降り」さっきまで挑戦していたのだが、どうせなら違う方法がいい。

「お悩みのようでしたら、私の得意な方法で実行いたしましょうか？」

男は立ち上がり背伸びをしながらさういうと、黒いカバンから四角い箱を取り出した。

「それは？」

「電気椅子セットです。」

「これはどのような椅子であつても5分で電気椅子に変えてしまうという優れものなのですよ。ここをこうすれば・・・」

男はそう話しながらリビングの椅子にその装置を取り付けていく。

「さあ、お座りください。この装置は操作も簡単でして、コンセントを差し込めば、あとはスイッチを押すだけなのです。」

私は恐る恐る椅子に座ってみた。曰ごろ座りなれている椅子なので、さほど違和感はない。

「では安らかな死を。」

男がスイッチを押すと同時に、全身に今まで感じた事のない衝撃が駆け巡る。

意識がとび掛けたその時、轟音とともに私の体の中に投げ出された。男が何か言っている。

私はやっとのことで気がついた。椅子は爆発により粉々になっていたが、私は体の節々が痛むがなんともないようだ。しかし、もうその時には男は部屋の中にはいなかった。

私は男の黒いスーツが脱ぎ捨ててあるのを見つけた。

「逃げられた」

そう思った私は、馬鹿馬鹿しくなってしまった。あんな見ず知らずの男を信用するなんて・・・

なにやら外が騒がしい。ベランダから下を覗き込むとサイレンの明かりが眩しく、人だかりができていた。その中心には黒服の男が血を流して倒れていた。

なるほど、私は直感的に理解した。

私はリビングに戻り、男のスーツを拾い上げそのまま家を出た。

自殺代行、それは自分の自殺を手伝ってくれるのではなく、自分の代わりに自殺する、そういうことだったのだ。

私は男のスーツに袖を通した。不思議とサイズがピッタリだ。すると上着のポケットで携帯電話が鳴った。

「町××番地で自殺願望の男性を確認。」

「いきますか？ いきませんか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8043g/>

「自殺代行株式会社」

2010年10月22日01時24分発行